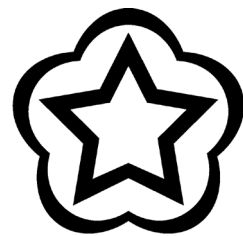


建学の精神

強くしなやかな精神と、新しい世界を切り拓く能力を、他者のために用いることのできる人間を育てる。



梅光学院 校章・マーク
梅光女学院創立当初からの校章。梅の花びらと星は、学院名である梅と光を表現しています。

学校法人 梅光学院

〒750-8511 山口県下関市向洋町1-1-1

TEL : 083-227-1000 FAX : 083-227-1100



創立

梅光学院は、スタウト夫妻が聖書を教科書にして始めた長崎の〈英語塾〉と、服部章蔵が下関に開設した〈赤間関光塩英学校〉(のちに広島の高陵女学校と合併して山口英和女学校を経て光城女学院と改称)から始まりました。

第一の源流である長崎の英語塾は、1872年(明治5)、すなわちキリシタン禁制の高札が撤去される前年に始められました。1869年(明治2)アメリカのオランダ改革派教会宣教師のフルベッキの後任として、ヘンリーとエリザベスのスタウト夫妻が長崎に到着。1872年(明治5)迫害が下火になったと判断して、秋ごろ夜間の英語塾を始めました。これがのちの〈東山学院〉になりました。同年11月にエリザベスが始めた女子のクラスが〈梅香崎女学院〉になりました。

1887年(明治20)伝道会社から学校設立のための資金とアルベルト・オルトマンという協力者が派遣され、女子のためにスタージェス・セミナリーが、男子のために普通部と神学部の2部門を持つスチール・メモリアル・アカデミーが開校。1891年(明治24)両校とも日本人校長を置くべき時がきたと判断し、校名も梅香崎女学院と東山学院という日本名に改められました。

神学部の経営はうまくいかず、1897年(明治30)中止。1903年(明治36)スタウトは、病床にあったエリザベス夫人を天に送りました。また、スタウトは神学部再興に関して、明治学院の神学部と合併すべきという南日本伝道会社と対立して、望みを絶たれ、1904年(明治37)退職しました。しばらくは長崎に留まり、YMCAで設計の仕事などをしましたが、ごくわずかの人が見送る中、アメリカに帰国しました。東山学院は1933年(昭和8)閉校となりました。

もう一つの源流 赤間関光塩英学校は、1879年(明治12)長老派教会の牧師 服部章蔵によって下関につくられ、のちに広島の高陵女学校と合併して山口の光城女学院となりました。1911年(明治44)アメリカの実業家から多額の寄付があり、二つの教派の二つの学校が併合して下関に設置されることになりました。名前は両校から一文字ずつとって〈梅光女学院〉と命名されました。



創立者夫妻 Henry Stout (1838~1912年)
日本人に伝道する青年を日本人の中から育てたことを誇りとしました。

Elizabeth Stout (1840~1902年)
苦勞の末に学業を終えたエリザベスは、質素、勤勉、忍耐をもって夫を助けました。



創立の背景と歴史

長崎伝道は、1859年(安政6)来日したフルベッキが行なってきました。大隈重信や副島種臣といった青年たちに英語を教えました。キリスト教への弾圧が厳しい時代で、確たる宣教基盤を残せないまま上京することになります。後任としてスタウト夫妻が長崎に到着した翌週にフルベッキは旅立っていきました。

スタウトははじめ、長崎府(長崎奉行の後身で長崎県の前身)管轄の(広運館)や公立学校で英語を教え、やがて私塾を開始。この塾は評判を呼び、町の有志の協力で50人の女子と30人の男子が学ぶ学校がつくられましたが、スタウトが聖書を教えると、反対が起きてこの学校はいったん閉鎖。フルベッキの推薦で熊本に赴任した、友人のL・L・ジェーンズの献金によって、再び、初期の塾の体裁をとって再開されました。

スタージェス・セミナリーは当時の婦人伝道局の局長で自ら多額の寄附をしたJ・スタージェス夫人に、スチール・メモリアル・アカデミーは17歳で亡くなった子息の教育のために準備したお金を寄付したウィリアム・H・スチールに因んでいます。スタウトは神学部を設けて、「日本人に伝道する青年を日本人の中から育てたこと」を誇りにしていました。本州から来ている者もいるほどでしたから、いかにスタウトの働きが他に先んじていたかがわかります。ほとんどの生徒は寄宿生でした。しかし、その後、交通機関の発達により、生徒たちは大都市の学校を選ぶようになってしまい、徐々に隆盛を欠くようになりました。伝道会社との対立の末に帰国するスタウトを見送った唯一の宣教師は、ミス・カウチです。カウチは後に太平洋戦争の戦局が厳しくなって帰国を促されたときも「天国へはアメリカからも日本からも距離は同じ」と日本に留まり、敵国人として浦上のマリア学園、東京のフランス学園に収容され、終戦の翌年、長崎で79歳の生涯を閉じています。

赤間関光塩英学校を創立した服部章蔵は、周防国吉敷郡吉敷村(現・山口市吉敷)出身で、同郷に澤山保羅、成瀬仁蔵がいます。15歳で長州藩の藩校〈憲章館〉の塾長になった秀才で、京都・蛤御門の変を皮切りに、数々の戦に従軍しました。

海軍兵学寮で栗津高明と出会ったことから伝道者となって下関に伝道を試みますが、キリスト教伝道では1軒の家も借りることができず、学校設置を願い出てつくられたのが赤間関光塩英学校でした。1882年(明治15)6月に山口教会創立に伴ない学校も移転。同年11月に広島教会を設立し、T・T・アレキサンドルと協力して高陵女学校を設立しました。のちに服部が山口に赴任する折り、赤間関光塩英学校と高陵女学校は合併。翌年、光城女学院と改称しました。

広津藤吉は、スタウトから囑望されて就いた梅香崎女学院校長から引き続いて新しく誕生した梅光女学院の初代学院長に就任し、終戦直前までその職務を全うしました。朝鮮(当時)釜山から新義州まで歴訪し、当時の朝鮮、満州、中国、台湾から多くの留学生を受け入れ、また、海外駐在員も子女を入学させました。これは交通の要所である下関に拠点を定めた服部章蔵の先見の明ということができるといえるでしょう。